

# 炭焼き窯の制作過程

企画・製作 瀬戸内町教育委員会

窯製作 徳 秀信



2007年 瀬戸内町嘉徳 創作空間「ムンユスイ」

## 創作活動の拠点として

旧嘉徳小学校の校舎など関連施設を利用した嘉徳芸術村「ムンユスイ」館は、本町でも特に自然環境のすばらしい嘉徳集落の中で、各分野の芸術創作活動が、町内外に波及していくことを目指す拠点施設として、平成17年度に誕生いたしました。

その活動を広げていく上でも、今回整備されました「炭焼き窯」は、大変意義あるものですばらしい出来映えとなりました。

生涯学習を推進する教育委員会といたしましても、今後は同施設を青少年健全育成の場として、また、地域住民の生活向上を図る施設として、利用していただければと考えております。

最後になりましたが、この「炭焼き窯」の制作に、3ヶ月間という、長期にわたって心血を注いでいただきました徳 秀信氏と嘉徳集落の皆様、そして、制作過程の一部始終を、丹念に記録していただいた堀 茂美様にお礼を申し上げ、あいさつに代えさせていただきます。

平成20年3月

瀬戸内町教育委員会

教育長 徳永 敬次



2007年5月 瀬戸内町教育委員会の発想と支援により、創作空間「ムンユスイ」(旧嘉徳小学校)の運動場に炭焼き窯の制作が始まる。

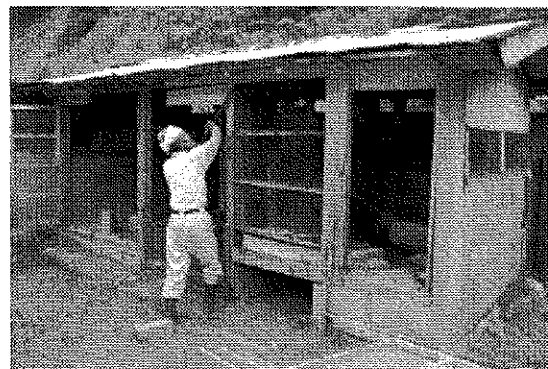
制作者の徳秀信さんは昭和6年瀬戸内町嘉徳(かとく)に生まれ、5歳から父親の炭焼きを見てきた。

初めて自分の窯を制作したのは20歳の時、それ以来55年間、炭を焼き続けてきた。今度の窯は記念すべき40基目だ。

本来、炭焼きは材料の木が豊富にある山の中で、斜面を利用して窯を作り、炭を焼く。そして、木を求めてつぎつぎと新しい場所へ移動しながら、窯を作り、炭を焼く。

今回は今までとは全く違う立地条件での窯作りである。

予想をこえた大変な作業になりそうだ。



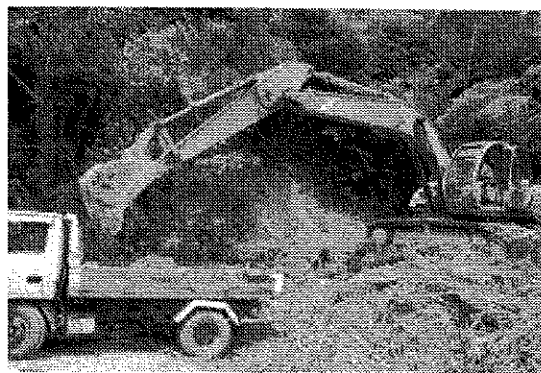
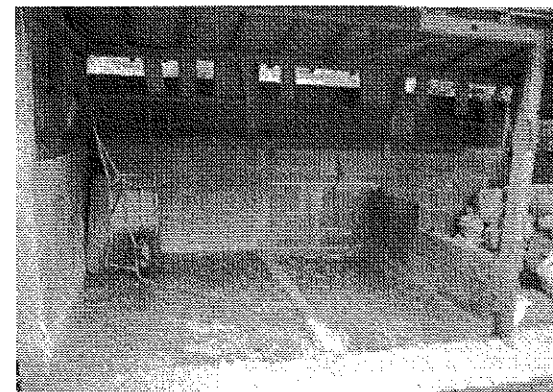
2007年5月16日

ムンユスイ運動場のすみで荒れていた元ウサギ小屋を、炭焼き窯(かま)にするための作業を開始する。

5月16日～18日

小屋のまわりのブロックの壁は炭焼き窯の外壁として利用する。

地面のコンクリートはきれいにはがす。



5月20日

窯の材料となる石、土、赤土を山から取り出し、運び入れる。集落の数人が応援。

ユンボ、トラックが数往復。



5月20日

あらかじめ山できっておいた生木（炭になる木）もトラックで運び、材料がそろえられた。

ようやく窯づくりをはじめることができそうだ。

5月21日

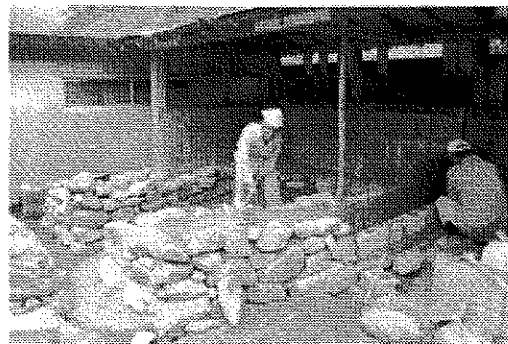
石と土を積み上げる一人の作業が始まる。

山の斜面を利用して作る窯の三分の一の大きさではあるが、平地に作るのので、石や土はその何倍も必要になる。



石を石垣のように積み上げ、山の土を入れていく。土のすきまから空気もれないよう、しっかり叩き込む。大胆かつ慎重な作業だ。

石を2～3段積んだら、土を入れ、しっかり固める。たくさんの土を一度に固めても空気穴ができるからだ。少しでも空気がもれると、焼いた時に炭にならず、灰になってしまう。

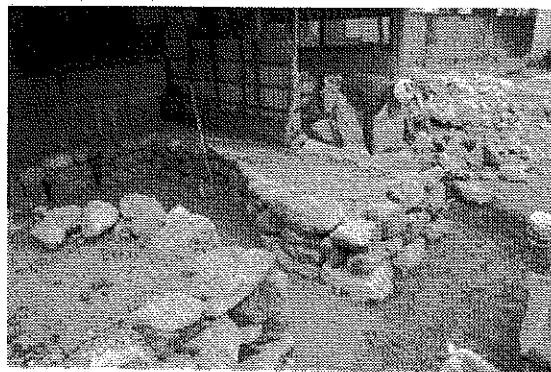


側面のブロックの高さがたりないので、さらに積んで高くする。



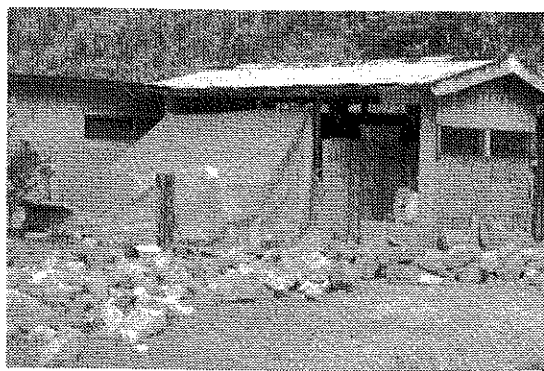
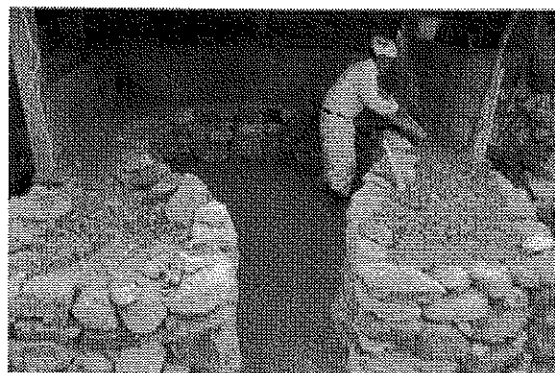
石組み、土入れ、たたき込みの作業が約一ヶ月つづく。土をたたいて固くする道具も、数種類手づくりだ。





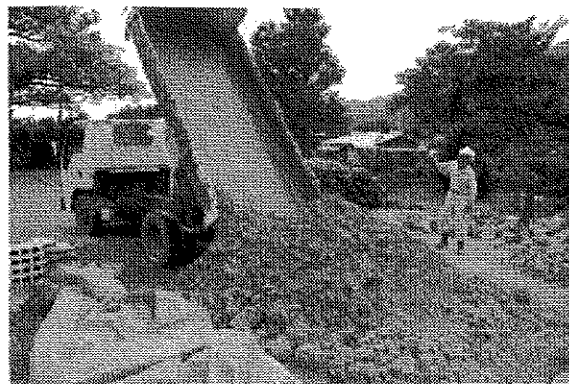
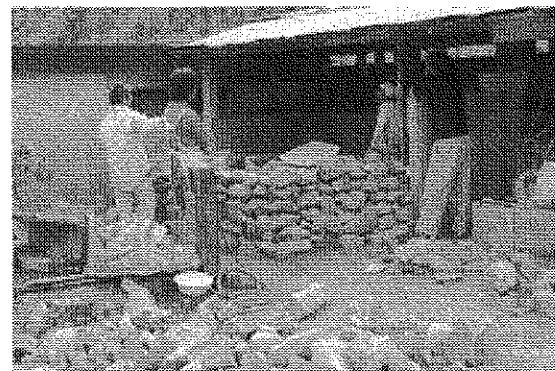
窯の中の床の部分や  
まわりに、赤土を  
敷きつめて、たたく。  
赤い色がとても  
美しい。

びたりと合う、大きさ  
や形の石を選びながら  
作業するので、時間が  
かかる。



窯のかべになる部分は、  
火をつける前に、雨に  
ぬれるとだめなので、  
作業が終わると毎日  
シートでおおう。

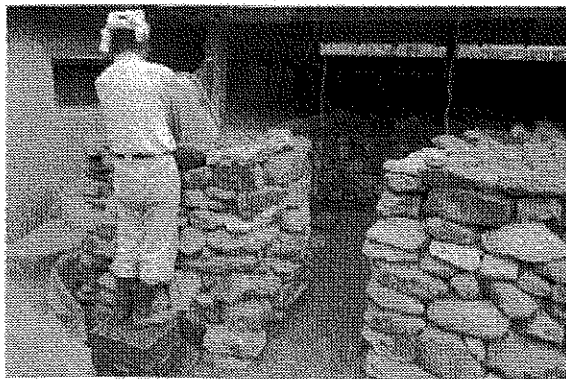
時折、近所の方が見学  
に来る。  
長年、炭焼きをつづけて  
きたカトク集落でも、  
窯づくりを間近で見る  
ことは今までなかった。



6月4日  
石、土が足りなくなった。  
再びユンボ、トラックと  
人手を借り、山から運ん  
でくる。  
予想以上に多くの石と  
土が必要だ。

運んできた土も、雨に  
ぬれると使えないので、  
シートをかぶせておき、  
必要なだけ取り出し  
ながら、作業する。



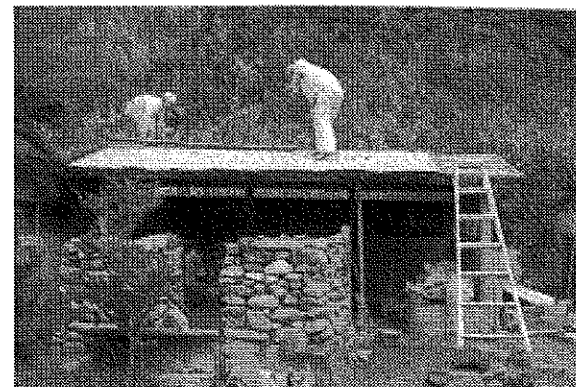


6月20日  
石組みがだんだん高くなり、土入れに苦勞する。

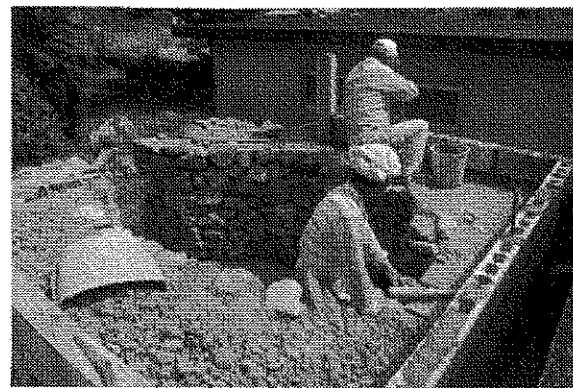
まだ石が足りないので、川で探して運び入れる。大石を抱え、何度もはしごをのぼるので、大変だ。



窯の奥中央にはエントツのため、耐火レンガと石でくぼみを作っておく。重要なポイント。



6月21日  
屋根の方向が違うので、トタン、板、柱、その他のまわりの木をすべて取り除く。



外壁のブロックも高さが足りないので、さらに一段積む。土入れ、たたき込みの作業もまだ続く。



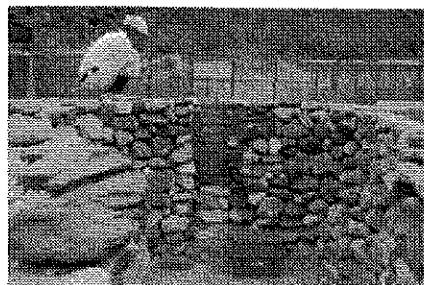
壁には微妙な勾配がつけられる。





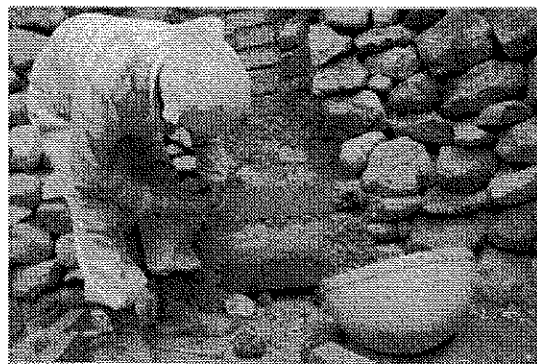
6月22日

最大の難関、エントツ作りに入る。  
まず、エントツの外壁がわの上部に  
レンガを積み、練った赤土を打ち  
つけながら、固めていく。  
びみょうな傾斜、煙道（けむりが  
あがっていく道）の大きさも考え  
ながらの細かな作業だ。

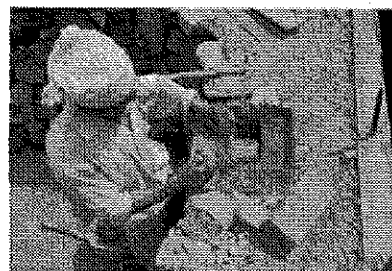
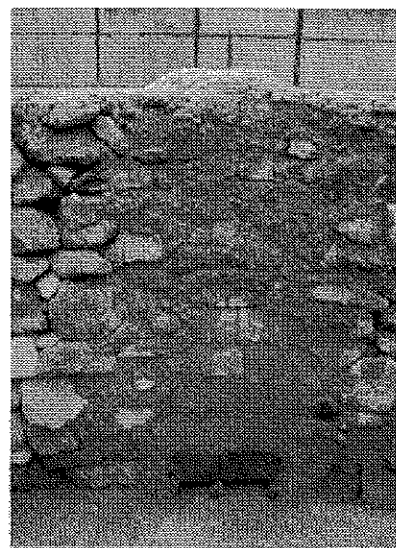
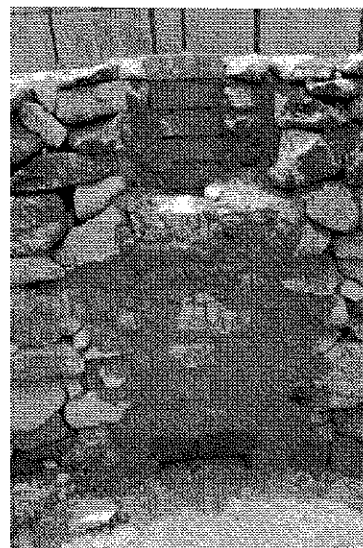


6月23日

エントツの内側の壁を作る。  
一番下には小さい穴で煙の  
入口を作る。  
レンガと石を組み合わせ、  
傾斜もつけながら、練った  
赤土でかためていく。

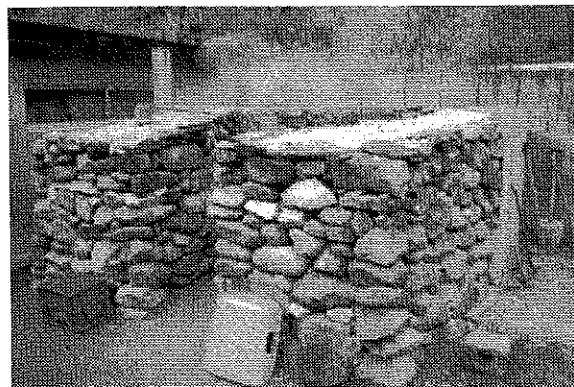
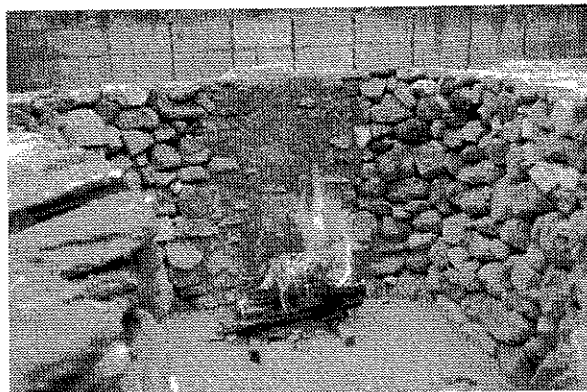


煙道が上に行く  
ほど細くなるよう、  
レンガの置きかた  
を工夫しながら  
積んでいく。  
経験と熟練が必要。



6月23日

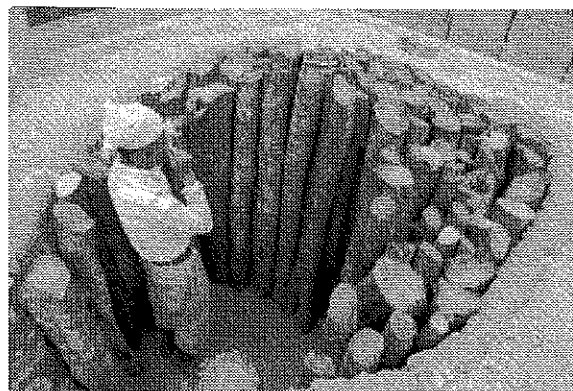
エントツの形ができたなら、  
煙の吸いこみ方やあがり  
方をチェックし、また  
中を乾燥させるために、  
数時間エントツの前で  
木を焼く。



6月24日

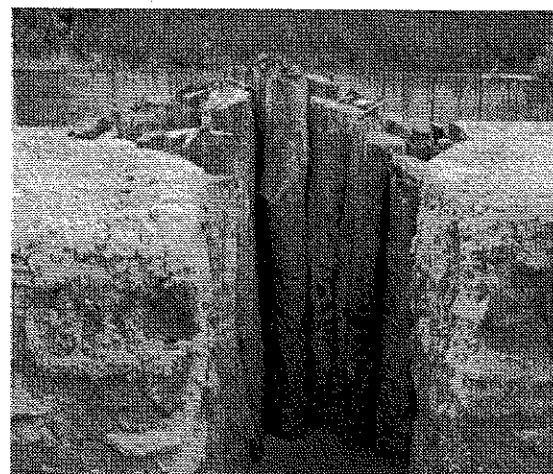
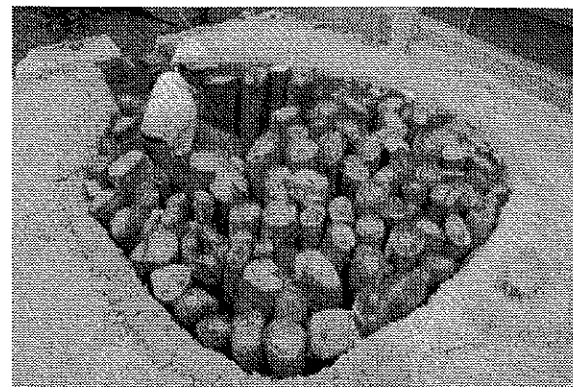
中までしっかり乾燥  
したエントツを上か  
ら見た所。

窯の内かべを練った赤土  
で仕上げている。  
美しい。



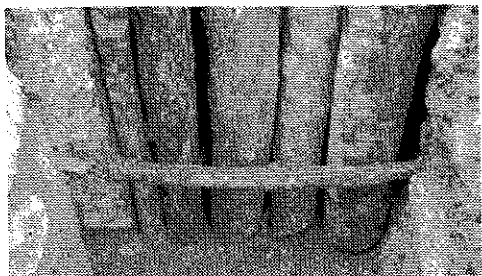
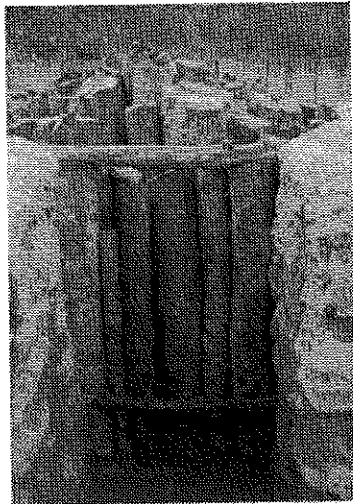
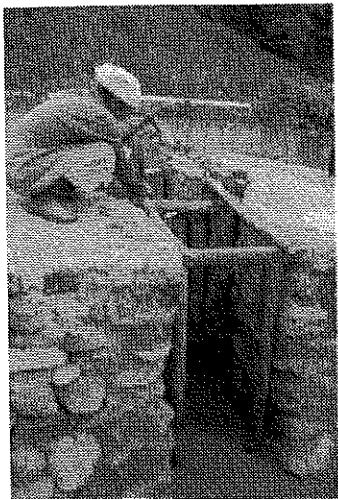
6月26日

窯の全体の形を考慮し、  
炭になる生木を並べる。  
長さや太さを合わせる  
ため、チェーンソーで  
切りながら、木をたて  
に置いていく。



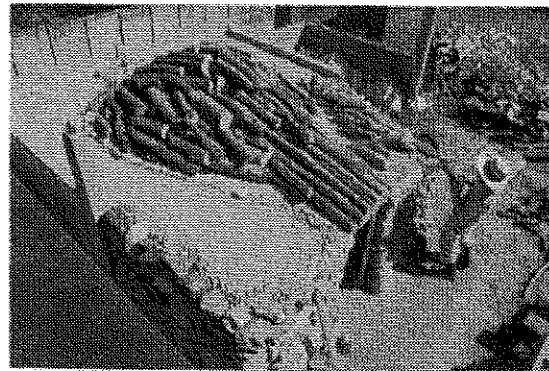
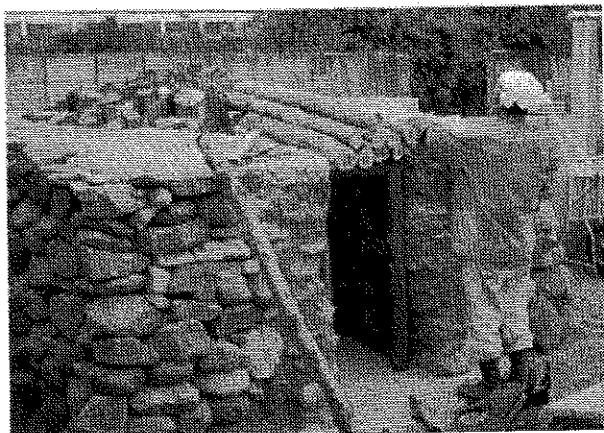
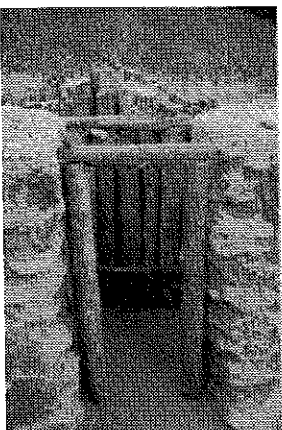
炭をつくるには、火が  
木の上部からついて、  
下へ下へと燃えていか  
なくてはならない。  
そのため、木はたてに  
並べていく。





6月28日

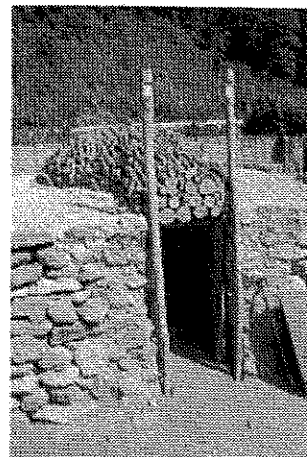
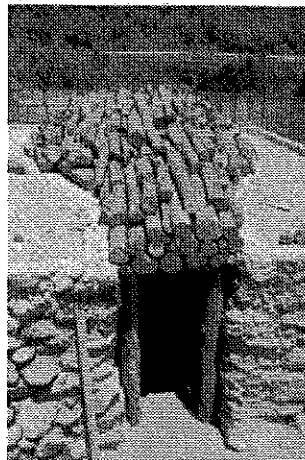
窯の入り口（たき口）は  
上に木と土をのせても、  
つぶれないように、たて、  
横にしっかり木を組む。



6月29日

たき口の組み木が完成した  
ので、窯の屋根の形に木を  
積んでいく。

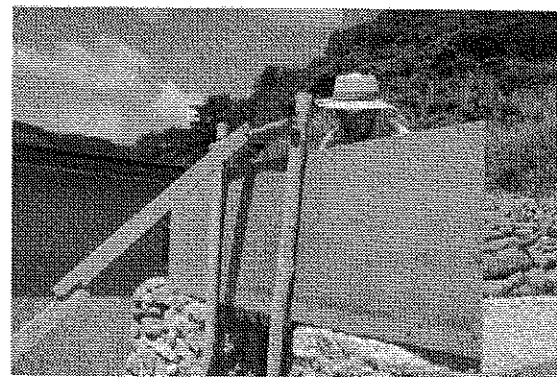
長い木、太い木、短い木  
などで、くずれないように  
うまく積み上げる。



6月30日

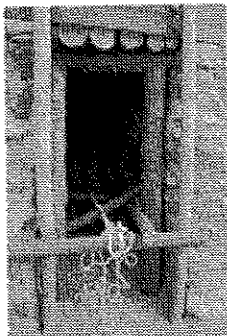
窯の形に木を積み上げたら、  
その上に土をのせるが、  
土が落ちてこないように、  
まず入口の上にベニヤと  
木で細工をする。

頑丈にしないと上にのせた  
土をたたくことができない。

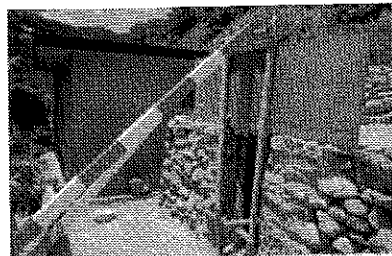


7月1日

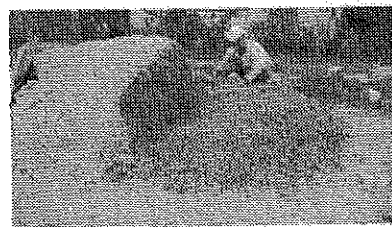
たき口がつぶれないように仕掛けをする。窯に積み上げた木の上に、ビニールや厚紙をのせ、その上に土を積んでいく。



土には石がたくさん混ざっているので、あらかじめ取り除いてから、窯の上のにせていく。窯の上までは高いので、土を運ぶ人手がいる。



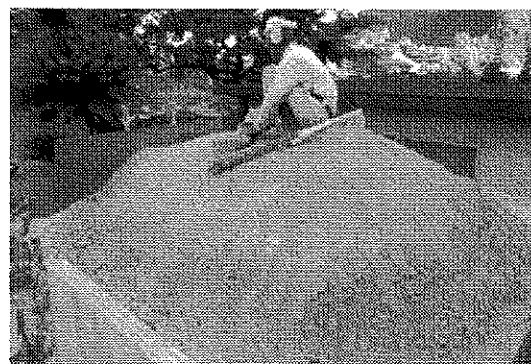
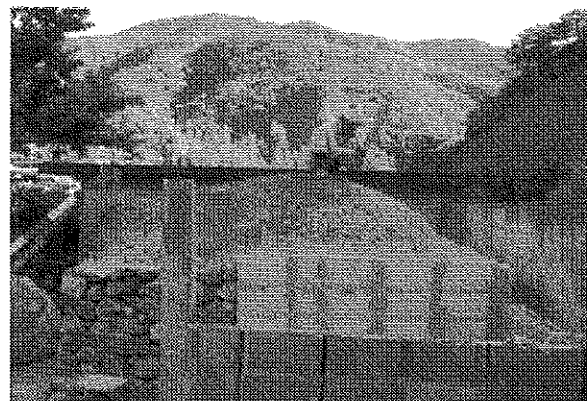
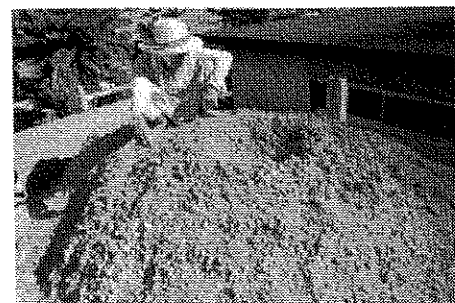
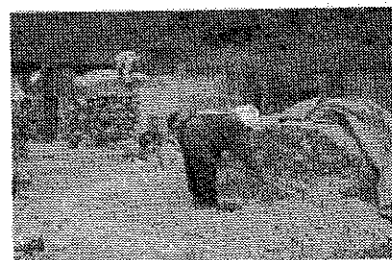
数人での共同作業だ。



むやみに土をのせていっても、くずれてしまうので、下からまた外側を高くして、積み上げていく。



炎天下なので、休み休みの作業だ。



7月1日夕方

頂上まで土を積み上げた。あと一息、土をしっかりとたたいて固めれば、窯の形ができあがる。

次の日、一日かけて固める。

7月5日

集落の大工さんたちと屋根を作る。

雨風を考慮して、簡単だけど

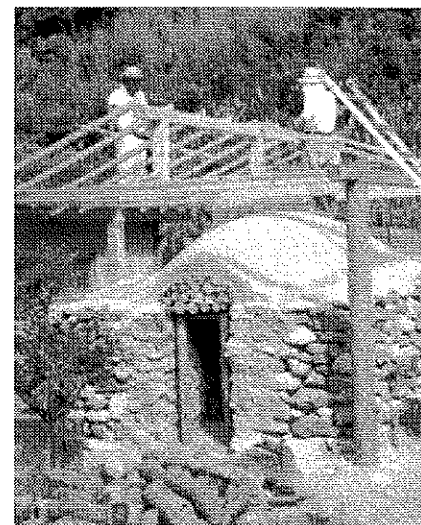
しっかり作る。

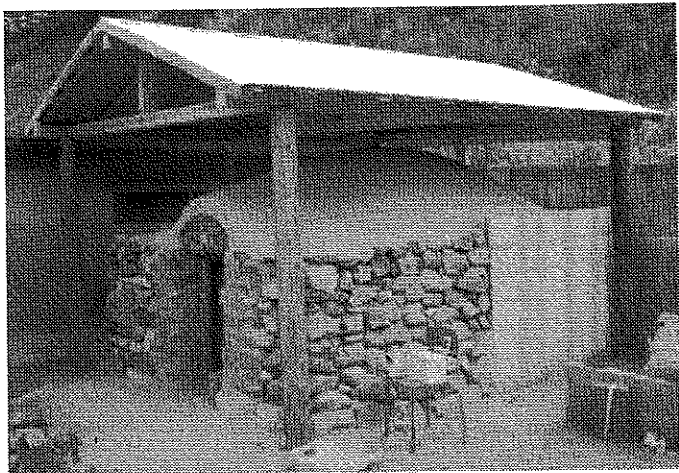
炭を焼くと窯全体からあくが出て

トタンがだめになるので、屋根に

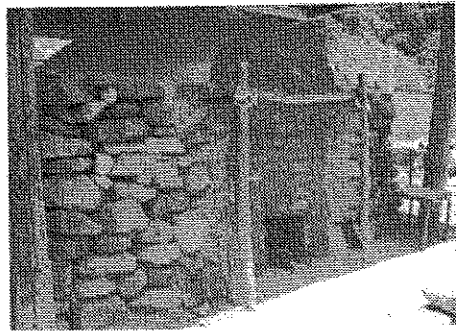
はビニールシートをひいてから、

トタンを打ちつける。



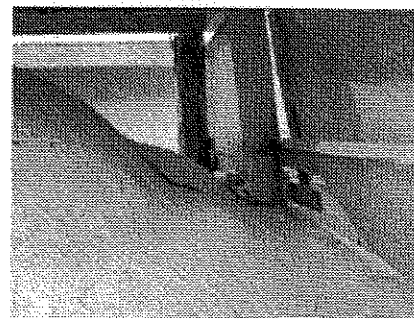
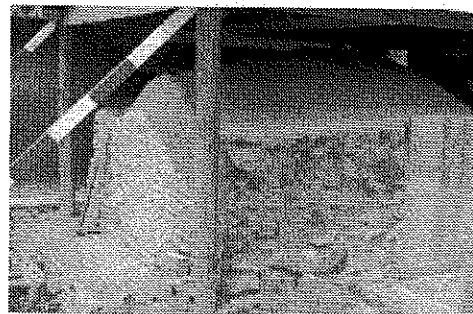
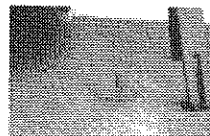


7月8日 火入れの日。  
 最初の火入れは、炭を作る  
 だけでなく、窯を焼いて完成  
 させるためでもある。  
 たき口の上の生木が見えて  
 いる所を、練った土でふさぎ、  
 たき口にたき木を入れ、火を  
 つける。

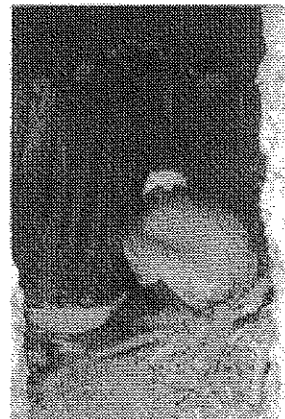
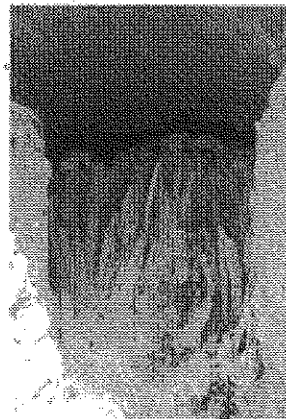


7月9日朝

たき口にふたをし、上部をあけた  
 あと、れんがと土でもう一度ふた  
 をする。上部がふさがったら、  
 たき口をあける。  
 煙の色で出来上  
 がりかどうか、  
 判断する。



エントツもふさぎ、炭焼きの火が消えたら、後は冷めるのをゆっくり待つ。



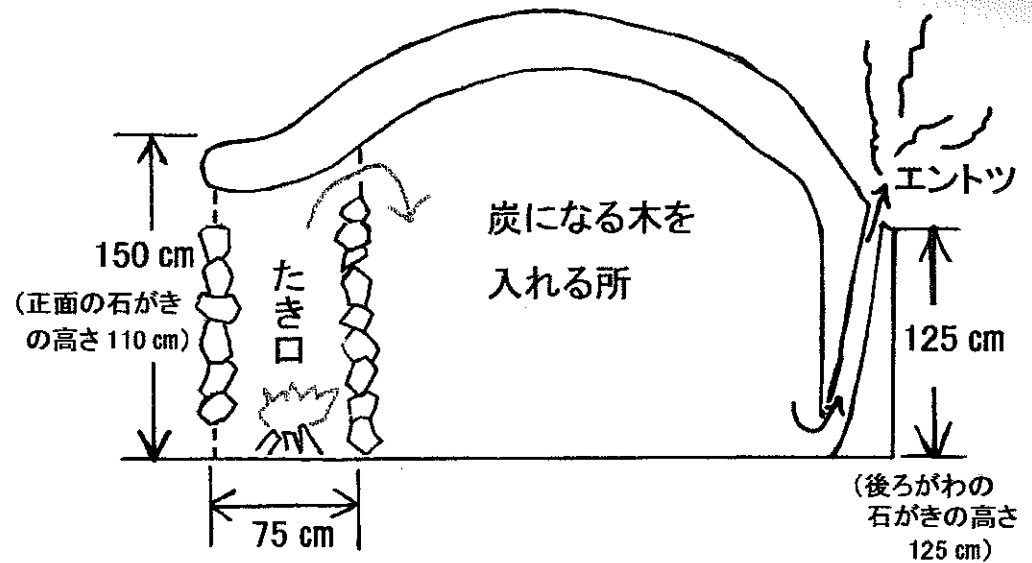
8月16日

初めての炭を取り出す。しんちょうに入口の壁をあけ、中をのぞくと美しい炭が見える。とても良い炭が予想より多くでき上がった。

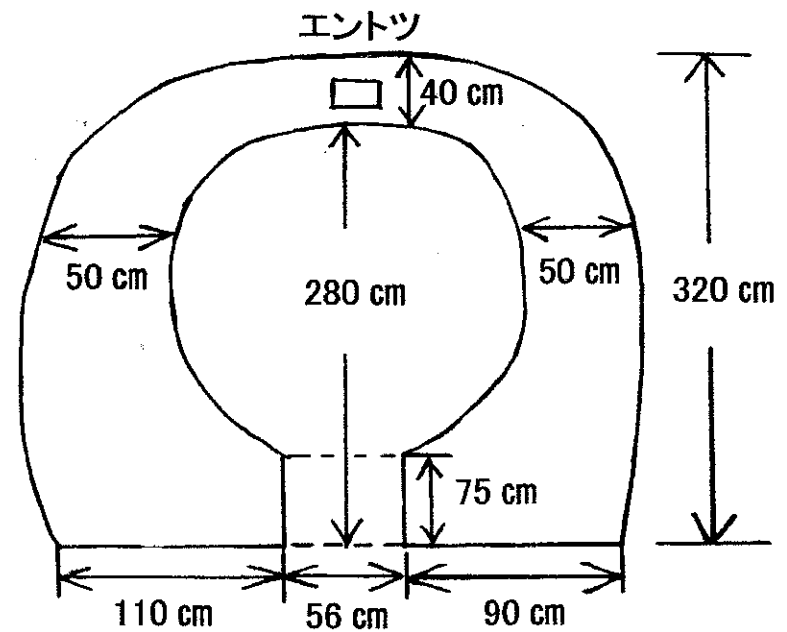
3ヶ月をかけて、徳さんの炭焼き窯がようやく完成した。

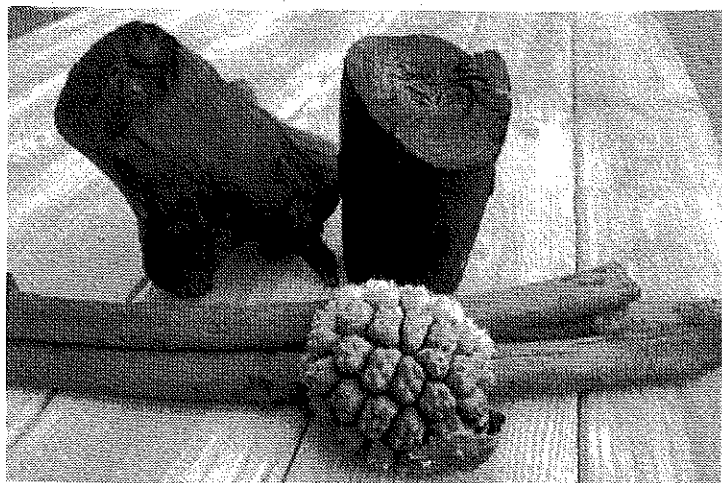


### かまを垂直に切った所



### かまを水平に切った所





2007年夏 炭焼き窯ができた。

教育委員会の思いと徳秀信さんの技が日に日に形になって、  
人間の力のすばらしさを目撃した三ヶ月だった。

この窯なら女性でも子どもでも、炭焼きにチャレンジ  
できるかもしれない。

できたものを利用していくのは私たちだ。

これから、どのように利用していくのか、創る喜びを  
たくさんの人と分かち合いながら、  
夢は大きくふくらんで行く。

小さなひとつの炭焼き窯でも夢は無限、それが人間の  
力だと思いたい。

写真・文 堀 茂美

2008年3月